



BEST PAPER AWARD (東京大学、奈良高明氏) 授賞式



BEST PAPER AWARD (電気通信大学、斎藤真希子氏) 授賞式

## ◆ Video Proceedings 担当

山之上裕一

NHK 放送技術研究所

今回の Video Proceedings の投稿にあたっては、NTSC ビデオテープでの投稿のみ受けることとした。ご不便を感じられた方も多くいられたことと思う。いろいろな国々の方からなるべく多くの投稿を呼びかけるためには、そのような制約を設けず他のテレビジョン方式やコンピュータファイル等での投稿も受け付けるべきだと思う。ただその場合、最終的な Video Proceedings としての画質の均一性が保たれるかどうかという問題や、査読者も含めた事務局側の問題もあり、あえて先のような制約を設けさせていただいた。しかし今後、ネットワーク技術、デジタル技術の進歩と機器の低廉化とともに、このような不便さも改善されていくことであろう。

さて本大会の Video Proceedings には、6件の研究報告が

収められている。内訳は、日本から3件、アメリカから2件、ヨーロッパから1件である。いずれの研究報告も、実験の様子や研究成果が映像でデモンストレーションされているため、わかりやすい報告となっている。また、本会議開催中の配布数は好評のため、急速追加した分も含め、NTSC360本、PAL60本となった。

## ◆ パネル担当

岩田洋夫

筑波大学

筆者は今回のIEEE-VRでパネルのChairを仰せつかったが、この役割は次のような意味において気を遣う仕事である。パネルは論文同様、投稿されてきたプロポーザルを審査して、採否を決めるということを行う。ただ、論文と異なる点は黙っていてもプロポーザルが集まってこないことである。そのため、panel chairが口コミでオーガナイザーになってくれそうな人にプロポーザルを出してもらうように頼むことになる。



Panel Session

プロポーザルが出てこなければ困るし、たくさん集まれば頼んでおいて落とすという失礼なことをやらなければならない。そのバランスをとりながら質の高いパネルを実現するのがたいへん難しい。今回もう一人のpanel chairとして次回のgeneral chairが予定されているMike Macedonia氏がアサインされていたため、氏とメールで打ち合わせを行った。日本でパネルを行う場合の障害は国外からパネリストを呼んでくる場合に渡航費などの手当てが出せないことである。この問題を考慮した上で、最後に採用になった企画は草原真知子氏によるインタラクティブアートをテーマにしたものと、Michael Cohen氏による音をテーマにしたものであった。IEEE-VRではこれまでにアートをテーマ